

平成21年 6月26日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520368

研究課題名（和文） 中古中世の古文書語彙の研究—状態・概念を表す名詞を主として—

研究課題名（英文） A Linguistic Study of Old Documents—On the Word ‘Keshiki’ in Early Japanese

研究代表者

辛島 美絵 (KARAHIMA MIE)

九州産業大学・国際文化学部・教授

研究者番号：60233996

研究成果の概要：

本研究では、鎌倉時代以前の文献資料における名詞「けしき」の用法の調査と分析を行った。その結果、古文書や古記録などの記録体で書かれた実用資料と、それ以外の資料（和文体や漢文体の散文や韻文の文学資料など）との間で「けしき」の用法に差異があることを明らかにし、その差異が現れる原因を分析することによって日本語資料としての古文書の特色の一端を解明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	650,000
2007年度	400,000	120,000	520,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：古文書、気色、景色、けしき、奉書、古記録、平安時代

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究開始の背景には、貴重な言語資料であるにもかかわらず古文書の日本語学的な研究がほとんど未開拓であるという状況がある。中世以前の古文書には、従来の文学資料などには見られない独特の表現、語彙が見られ、それが後代の日本語に影響をもたらしたと思われる点も多い。原本が残る一等資料でもあり、きわめて重要な過去の言語資料だということができる。しかしながら、研究はやっと緒に就いたばかりでまだまだ謎の部分が多い。本研究の

独創性の一つは、このような未開拓の資料に注目し、日本語史研究にあらたな材料を導入しようとするところにある。

(2) 本研究は、古文書が当時の実際の言葉のやり取りを反映した資料であることに注目する、すなわち日本語の口語の変遷に注目する研究であるが、このような研究は従来ほとんどなされていない。従来の文献資料によった古典語研究は、三人称の資料をもとに研究されることが多かったため、現代日本語研究につながるような、対話や談話を舞台にした語用論的な語の意義変化

をあつかうことが不得手であった。対して、古文書は、差出人と宛名人という実在した二者間でとりかわされた実用的な生きた言語が文字化されたものであるため、現代の会話と類似の言語のやり取りを観察できる貴重な資料である。ところが、そこにはどうしても書記言語としてのフィルターがかかってしまい、あるがままでは日本語史の、とくに口語史の資料としては利用しにくい。そこで、古文書の資料性を解明し、言葉のやり取りが本質的に持っている特色を書記言語の制約の隙間から抽出しようとするのが本研究のもっとも独創的な点である。

- (3) 本研究は、従来は主に国史学の分野の資料と考えられてきた古文書を使用した学際的な研究を目指す点に新規性を有する。日本語学と国史学の学際的研究は未だ十分になされているとはいえない。古文書における語の実態が解明されることで古文書の不可解な表現についても解釈の糸口を提供でき、国史学研究にも寄与するところが大きいと思われる。
- (4) 現在は、研究を強力に推進すべき時期である。昨今は国史学の研究成果として多くの古文書の写真の整理が行われ、東大史料編纂所ホームページ上でも古文書の画像やデータベースが公開されつつある。以前は研究したくてもできなかった古文書の表記の検証も比較的容易になってきた。この機会を逃さず、広く学会に古文書研究の意義と有効な利用法を提示する必要がある。

2. 研究の目的

中古中世の古文書において状態・概念を表す名詞を調査し、その使用状況と同時代の他の文献資料での様相を比較検討することにより、古文書の日本語史資料としての性格の一端を解明し、利用法の確立を目指すこと。

3. 研究の方法

古文書のうち、状況や概念を表す名詞語彙の、とくに人の様子、事物の様子に関する名詞を採取した中から、他の資料に比べて特色的な用法を呈する語として「けしき」に注目した。また、その用法が現れ始める時期が10世紀ごろであることを踏まえ、10世紀以前の多くの種類の文献資料（古文書、古記録、歴史・法制関係資料、有職故実関係、伝記、系譜、地誌、漢詩・漢文学関係、仏教関係、医学・薬学書、辞書・教科書、歌学書、歌謡・楽書、紀行、随筆、俗諺、卜占関係、説話、物語、軍記、日記、和歌など）から「けしき」「気色」の例を600例程度抽出し、可能な限り原本や古写本の写真で表記等を確認しつ

つ、分析を行った。また、古文書については鎌倉時代までの奉書における「気色」の用法について分析した。着目点は以下のごとくである。

- (1) 10世紀以前の文献資料には「けしき」「気色」はどのような用法上の特色があるか。用例の半数は、これを修飾する語句が表示されている。また、約9割は、文・句中の動作・状態を表す述語に対し、主格・ヲ格・ニ格となるものである。そこで、「けしき」の修飾成分と、主格・ヲ格・ニ格の「けしき」が連なる述語の意味を手掛かりに、一文の意味や場面も検討しつつ、当時の「けしき」の用法上の特色を探る。
- (2) 当時の「けしき」は当時の社会においてどのような場合に用いられたのか。「けしき」と感受者の動作を表す語との関係や、「けしき」を評価した用例等を検討することによって分析する。
- (3) 古文書には「けしき」がどのように使用されているか。まず定型の文言が出てくる時期を、『大日本古文書』『平安遺文』『鎌倉遺文』所収の文書と、東京大学史料編纂所がホームページ上で公開しているデータベースを用いて調査する。また、10世紀以前の用例について以下の点に着目する。
 - ① 「けしき」の使用頻度
 - ② 「けしき」が使用される文書の傾向
 - ③ 述語との関係
 - ④ 何の「けしき」を誰が感受するか
 - ⑤ 感受した「けしき」をどうするか
- (4) 古文書の「けしき」が他の文献の用法とことなる特色を見せる（奉書において「けしき」が「仰せ」と通じて用いられる）のはなぜか。「けしき」が「仰せ」と通じる理由を解明するために、「言う」「のたまう」等の言語伝達行為に関する表現と「けしき」との関係に着目する。10世紀以前の用例の中から、聞き手が「けしき」を捉える人、話し手が「けしき」を発する人という関係、つまり「けしき」が「仰せ」と通じうる条件で用いられるものを抽出すると、該当例は合計117例となる。この用例を中心に資料を問わずにみられる特色と、古記録や古文書のような記録体の実用資料にのみ見られる特色について検討する。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」の(1)~(4)によって実施した成果を以下に記す。

- (1)については、10世紀頃までの日本語文献

における「気色」「けしき」の例には、次の①～④の用法上の特色が存することを指摘した。これにより、少なくとも10世紀頃までは、人の「けしき」も、自然の「けしき」も、根本的な語義は同じであり、ともに〈眼前には捉えがたい個別的な人や事物の状態・動作等を、人が捉えてはじめて存在する〉性質のものであることが分かった。

- ①個別的な人や事物について用いられる
- ②外界に常に在るのではなく、捉えられ受取られて存在する（わずかではあるが人が意図的・積極的に発するがごとき用法も見られる）
- ③重点は、眼前に具体的に実在するものではなく、目に見えない心の状態、眼前にない過去や未来の出来事、あるいは故意に隠された動作・状態の表現にある（わずかではあるが眼前の状態そのものについて用いる例も10世紀末には見られる）
- ④「見る」「見ゆ」が承ける例が多いとはいえ、視力のみで見るのではなく、嗅覚や皮膚感覚なども含めて捉えられる

(2)については、当時の「けしき」が、基本的には、生活に根ざした実用的な場面で使用される語であったことを明らかにした。「けしき」のほとんどの例は、資料のジャンルを問わず、生活上の行動や判断のための情報として役立てられており、観賞目的の使用例は非常に少ない。情報としての例は、私的情報としてあるいは公務上の情報として、第三者へと伝達される場合も見られる。

(3)については、次のごとくである。

古文書では「けしき」は

- ①11世紀以降では、使用例が漢字書きの下達文書に偏って多用されること、仮名文書にはほとんど使用例がないこと、また、11世紀以降に奉書において「仰せ」と通用して用いられること

が明らかになった。一方、10世紀以前の古文書の「けしき」については、

- ②使用頻度は低い語である
- ③特定の様式の文書に偏って使用されることはない

ことが明らかになり、「けしき」は10世紀以前には特定の古文書の定型的表現として用いられてはいないことが明確になった。現存する奉書はほぼ11世紀以降のものばかりなので、10世紀以前に奉書の定型句の例を見出せないのは当然であるが、奉書に限らず、特定の様式の古文書の定型句として「けしき」が用いられる例はない。また、

- ④「けしき」の述語の傾向は、当時の他の文献資料と異なる
- ⑤特定の身分・地位・立場の人の「けしき」に限って使用される傾向は何もない

⑥「けしき」を感受する人物も特定の身分・地位・立場の人に偏ることはない

⑦誰が誰の「けしき」を感受するかという関係において、上下・強弱等の明確な関係は見出せない

ことが明確になった。これにより、10世紀以前の古文書の「けしき」の用法は他の文献資料とおおむね同様であることが確認できる。しかし、(2)で挙げた特色である

⑧感受した「けしき」を情報として別の人へと伝える例が多いこと

については、古文書に特色的に現れた用法であることが明確になった。ただし、わずかではあるが他の文献資料でも対話の場面に伝達の例が指摘できることから、「けしき」の伝達自体は、当時の実際の対話でしばしば行われていたことが推察される。古文書に偏在するのは、〈現実社会において差出人と宛名人の間でやりとりされたもの〉〈特定情報伝達の高い必要性のもとに作成されたもの〉という古文書の資料的特色によると考えられる。

(4)については、次のごとくである。

資料の種類を問わず指摘される、言語伝達行為に関する「けしき」の特色としては

- ①言葉の表現の形式、内容、発話時の動作や身体の状態、場面や状況などの伝達行為に関する種々の要素が「内面の現れ」として複合的に捉えられる

ことを指摘した。一方、古文書や古記録のような記録体の実用資料にのみ看取される「けしき」の特色としては、

②上位者の「けしき」を捉えようとする表現が多い

③上位者の「けしき」をうかがって、命令・指図の言葉を得る例が見られる

④「けしき」の示す人の心理・内面の記述が具体的で論理性を持つことを明らかにした。

④のような論理的・具体的な内容の理解に繋がる「けしき」としては、①のような言外の諸要素も関係はしたであろうが、論理性をもつ内容の伝達には言語形式での明示が必須であること、さらに③の用例が存在することからすると、④の主たる「けしき」とは、「実際に上位者により発話された様々な日本語文である」と結論される。つまり、

⑤和文の文学資料の言語伝達に関する「けしき」は言外の徴証も含めて複合的に捉えられる例が主であったが、古記録や古文書のような記録体の実用資料では、言外の徴証よりも言語で表示された言葉自体に依存する例が多い

ことが明確になる。記録体の実用資料に⑤のような用法が見える理由は、

⑥朝廷社会では②のように上位者のもろも

ろの言動を常に〈けしき〉として捉えようとする傾向が強かったこと、朝廷業務では言語で論理的に明示すべき内容の記録や伝達が多いこと、命令の伝達や記録では上位者の発言の要旨を把握することが求められこと、上位者の命令の発言の要旨は上位者の意図と近接すること

などが考えられる。そこで、古文書で「けしき」が「仰せ」と通じて用いられる理由は、⑦上位者の命令・指図を求めることを「けしきを俟う」等と表現することが定式化していれば、うかがった結果を伝達・記録する際にも、「けしき」という語が用いられやすくなるが、そこで実際に報告・記録されるのは、発言の要旨である、そこに「けしき」が要旨と結びつく契機があると結論した。

この変化のそもそもの始まりは、上位者の意図を量ろうとする行為の表現に「けしき」という語を用いたことだと思われる。それは、古く、続日本紀の養老五（721）の元正天皇の詔で、天皇が「風雲」の「気色」を「天地」の譴責の意志の現れとして受け取る行為、つまり天の意志をその「けしき」から量る行為に通じる。

人の内面には種々の心情があるが、命令に関するこのような諸例を除くと、「けしき」が内面そのものを指示した用例は10世紀以前の諸文献には見出せない。本研究で取り上げた諸例は、「けしき」が〈内面や隠された状態の現れ〉から〈内面と外面が一体化したもの〉を指示するように変化した最初だと考えられる。奉書の定型的文言に見るような「けしき」の用法が、以後どれほどの社会的な広がりを持ったかは、今後の調査で明らかにすべきであるが、政治・文化の中核部における用語の影響力はけっして弱くはなかったと思われる。つまり、「けしき」の用法変化については、

⑧特定社会の、特定の内容と場面を背景に起こった

ことが明らかになり、古文書や古記録がそのような朝廷の公務の社会の言語の動態を反映する資料であることの実例の一端を示し得たと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- (1) 辛島 美絵、「古文書の〈けしき〉——〇世紀以前の古文書に見られる「気色」の特色——」『九州産業大学国際文化学部紀要』(九州産業大学国際文化学会編)、査読無、40号、2008年、pp.15-34

- (2) 辛島 美絵、「古代の「けしき」の用法——情報としての「けしき」と観賞する「けしき」——」、『國學院雑誌』(國學院大學)、査読有、108巻11号、2007年、pp.61-72

- (3) 辛島 美絵、「古代の「けしき」——平安前期までの〈気色〉の特色——」、『国語と国文学』(東京大学国語国文学会)、査読有、第84巻4号、2007年、pp.55-69

[学会発表] (計5件)

- (1) 辛島 美絵、「古記録・古文書等にみる〈けしき〉の用法の展開」、平成21年度九州大学国語国文学会、2009年6月7日、九州大学留学生センター国際ホール

- (2) 辛島 美絵、「文献資料に見る「けしき」——なぜ古文書に「けしき」が多用されるか——」、第249回近代語研究会、2007年11月6日、琉球大学

- (3) 辛島 美絵、「日本語「けしき」の変遷」、人間—環境系の媒体としての景観プロセスに関する学際的研究2007年度シンポジウム、2007年11月2日、九州産業大学

- (4) 辛島 美絵、「古代の「けしき」の変遷——〈気色〉の実用と観賞——」第214回筑紫日本語研究会、2007年8月10日、大分県九重共同研修所

- (5) 辛島 美絵、「平安前期の気色」第209回筑紫国語学談話会、2006年8月11日、大分県九重共同研修所

[図 書] (計2件)

- (1) 月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編・辛島美絵分担執筆、武蔵野書院、『古典語研究の焦点(仮題)』のうち「「気色」と「仰せ」——古記録・古文書等にみる〈けしき〉の用法の展開——」、2009年10月刊行予定、550頁のうち28頁の予定

- (2) 筑紫国語学談話会編・辛島美絵分担執筆、風間書房、『筑紫語学論叢Ⅱ——日本語史と方言——』のうちⅢ章「「けしき」をめぐる(二)——古代の「気色」の特色——」、2006年、603頁のうちpp.297-313

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辛島 美絵 (KARAHIMA MIE)

九州産業大学・国際文化学部・教授

研究者番号：60233996